

平成27年1月1日発行 春燈/第70巻第1号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

January 2015

1 月号



主宰の句

安立公彦

冷やかにわが身を縛す風山廬

(甲府三句)

朝霧の白きがうごく甲斐五山

身に入むや甲斐三代の三葉松

(武田神社)

帰り花夜ごとの星の輝きに

やはらかき水面や京の初しぐれ



成瀬櫻桃子の句

澄む水をのぞけば映るわれと子と

『風色』昭和四十八年

師は、句集『風色』のあとがきで愛娘美菜子様の病に
触れ「この娘あるゆえに、とかく挫折しがちな精神を奮
起させ、詠いつづけてこられたのだとも思う」と書いて
いる。そして、私兵にまで「昨日は、美菜子と散歩をし
ましてね」などと楽しそうに話して下さったりしたもの
だ。掲句は、その散歩の途中のお二人の姿が浮かび上
がってくるようで、私の心は惹かれるのである。

綱 徳女

成瀬櫻桃子の句

荷風忌やカツ丼とほす大黒屋

「春燈」平成四年

『成瀬櫻桃子俳句選集』晩年譜を見ると、平成四年四月十九日、「春燈千葉支部大会」が市川で開催されています。「大黒屋」は、晩年を市川で送った永井荷風が足繁く通ったという店で、カツ丼と香の物の「荷風メニュー」なるものがあるそうです。「真間の継橋」や「手児奈靈堂」などを散策された櫻桃子先生は、「大黒屋」に立ち寄り、カツ丼を召し上がったのかも知れません。

生田高子

燈下集



○ 諸岡孝子

魯田に暮色をたたむ風の声
ジューバンの溷びて乾く冬はじめ
出不精の夫に謎かく小春かな
蒲団干し小さき幸の綴ぢるゑくぼ
艶やかな炭の切口炉を開く

○ 小泉三枝

葦刈や葦原動く一ト処
こぼれ萩父母に詫びたきことばかり
読みさしの詩集に寐る秋思かな
一葉の十四ヶ月露光る
甲斐駒や露の連山ひとり占め

○ 宮崎裕子

秋しまひ烽火のやうに煙上げ
露けしや文字の消えたる道しるべ
能面の打たるる音や流れ星
味噌蔵の香りを発す寒露かな
連山の鉢の底なる甲斐の秋

魔女の爪と化すや真つ赤な唐辛子
話好きにつかまつちまふ冬隣
青北風や美しき楷書の男文字
肥後守で削る鉛筆文化の日
折れさうな月のかかりし喪の帰り

○ 上品の御仏おはす紅葉寺

花野風ひたすら耳にピアニツシモ

ともしびのもるる街道秋時雨

運動会の子の背いささか反抗期

唐辛子とがつつた顔で刻みけり

○ 田嶋洋子

少年の吹く笛の音や下り鮎

せきれいや合戦跡の川飛沫

秋冷の一隅灯る山廬かな

ワイン試飲の小さきグラス秋のこゑ

武田節和する一門霧月夜

○ 菅澤陽子

学習塾のチラシの入る敬老日

庭師来ていよよ秋天広ごりぬ

未枯の土手かけのぼる子と犬と

フォレストと「ふるさと」唄ふ夜の秋

爽やかに席譲られてしまひけり

○ 忘却は古いの妙薬にこり酒

ストリートジャズで見送る帰燕かな

貸借の無き身は軽し西鶴忌

雨後の空あつけらかなと酔芙蓉

紺青の皿に秋刀魚の海恋へり

○ 白神知恵子

夫が褒むわが丹精のさねかづら

秋の虹童女の涙すぐ乾き

団栗やだまされてゐる児の用品

綿虫を追うてすげなき返事かな

昔菓子紅葉を添へて届きけり

○ 長谷川歌子

スーパ一の祀る祠や秋祭

星飛ぶや文字ぎつしりのメール来し

手に余る子供抱くごと萩括る

ギリシア神話のロマンの数や星光る

届きさうで届かぬ手先茗荷の子

当月集

安立 公彦選



○ 西岡啓子

六地藏の口元ゆるぶ菊日和

今年酒旅のみやげを広げけり

葉一つ床に落ちぬる夜寒かな

読みかへす母よりの書や菊の酒

萩焼の猪口の大小夜半の秋

○ 浅木ノエ

父と訪ふ父の母校やいわし雲

秋うらら男料理の集め汁

数行でこと足る履歴のみみず鳴く

昼灯す文学館や秋薔薇

豆腐屋の秋夕焼を連れ来る

○ 藤丸誠旨

命六つ火山灰に鎮もる秋の果 (御嶽山)

水にまだ甲斐の空あり初時雨

妻に告ぐ麦蒔く人に会ひしこと

神の旅詩神は残り給ひけり

酒酌めばしみじみと冬来りけり

○ 齋藤晴夫

稲架解くや日は遠山の背に沈み

小山田に藁焼く焚火暮れ残る

鱒雲潮の色の魚を買ふ

恙なき一日を謝して落葉掃く

箒目に散りし落葉の美しき

○ 中村紀美子

金色の没日の沼辺赤とんぼ

袖なしに残る母の香夜寒し

人待ちの夕闇つたひ金木屋

新蕎麦や街道見ゆる連子窓 (木下街道句)

木下河岸助と標識一つ冬の川

春燈の句

安立 公彦選

諳んずる百人一首秋灯

東京 坂本依誌子

背負籠のくさぐさの花風炉名残

床の間に一枝欲しき照葉かな

煮物椀の利休豆腐や炉を開く

山近くなりし車窓や柿日和

千葉 木村みどり

家系図に幾度も見入り秋深し (谷崎潤一郎展)

露こぼれ変はらぬものに石畳

君と見し賢治の山の銀河濃き

寒露過ぎ風雨の通夜となりにけり

茨城 石橋 邦子

藍いろの筑波出てゐる文化の日

一茶忌や守谷にのこる寺ふたつ

立冬や一灯ともる徳萬寺

秋風の眉目くすぐり過ぎにけり

神奈川 長坂 正昭

秋の日や白光受くる身のほとり



秋の灯や身を寄せ合うて路地住まひ

師の影は踏まじと秋を惜しみけり

色々と破戒もあれど十夜粥

甘諸嫌ひ七十年でやや薄れ

綿虫や疲れやすさの募る日々

栗食めば小さき幸せ一つづつ

安房なれや千の穂田ほのぬくし

上総掘りのポンプ汲む音秋入日

コスモスにはやみる風のかれかな

千葉 廣瀬 克子

高階に舞ひ込む黄葉日のぬくみ

滑車網を手繰る夫婦や秋高し

爽やかや窓に朝日の木々の影

ふるさとや刺身三食ぬくめ酒

マディソン橋母の散骨秋日に舞ふ (クリント)

長崎 増田 菖波

余言

安立公彦

枯蓮のその枯れざまを称ふべし

西川 保子

「枯れる」という言葉は、枯渇、衰亡を示す。若い時分は、ことにそういう意識が強かった。しかし、年を重ねるほどに、「枯れる」のもう一つの意味である。「円熟」という解釈が考えられるようになった。

この句、「枯れざまを称ふべし」とある。「枯れる」という現象には、豊かな実りが前提として存在する。目前の「枯蓮」、その姿の奥にあるものを、作者はしっかりと捉え、これを称揚する。この句に表現の円熟さを見るのは、評者のみではなからう。

燭ひとつ足して御堂の秋深む

佐藤 信子

秋の勉強会は、秋色深い甲府を吟行地として催された。この「御堂」は場所の指定はないが、甲府は信仰の地であ

る。塩山には夢窓疎石を開祖とする名利恵林寺がある。さらに甲府五山、甲斐善光寺もその一つと言えよう。

「燭ひとつ足して」に、信仰深い作者の佇まいを見る。「燭ひとつ」は、御堂の奥深さとともに、作者の信心の篤さをも表わしている。御堂と一体になった思いの深さが、一句を統べる。「秋深む」の季語が、間然するところの無い形で、その「思いの深さ」を支えている。

色かへぬ臥竜の松の山廬かな

鷹崎由未子

秋冷の一隅灯る山廬かな

田嶋 洋子

勉強会で訪れた「山廬」は、山手の奥ふかい村里にあった。ゆるい石畳の片側に、写真で見ただことのある家敷が悠然と建っていた。この地に来る前に見た、文学館の庭園の蛇笏句碑、建立中の龍太句碑などが思い出されて来る。飯田家は名字帯刀の家柄で、大地主でもあったという。

邸宅の裏庭には、年経た大櫓が晩秋の空に高々と聳え、庭前の巨大な赤松が、文字通り竜の臥す姿で横たわっていた。前句は山廬にその赤松を配し、「色かへぬ臥竜の松」と力強く表現し、山廬を印象深く詠み込んでいる。

山廬では、折しも句会が催されているということで、桁行の長い屋敷の一隅に灯りが点っていた。そのほのかな明かりは、見ているだけでこころ潤うものだった。「山廬」

は俳人にとつて、言わば史蹟である。ここに掲げた二句は、そういう思いを内に秘めている。

拍手を上手に打てて七五三

岩永はるみ

武田神社には、七五三の参詣者が多かった。女兒も七歳になると、成長に差が出てくる。着飾った女兒が父母の先に立つて歩いている姿は頼もしいが、大方の子は、両親に手を引かれるように歩いている。見ている立場にとつては、そういう姿の方が微笑ましい。

この句の子は、三歳の女兒だろう。「拍手を上手に打てて」に、見守る親の安堵が伝わってくる。七五三は冬季の行事だが、晩秋のこの日は、ことに相応しい日和だった。

幾たびも鳴竜呼べり甲斐の秋

佐渡谷秀一

「甲斐善光寺」の前書がある。かなり大きな寺院だ。由緒も深い。拜殿の一隅に立ち手を打つと、にぶい残響が聞こえてくる。いわゆる「鳴竜」である。これは辞書にも出ていて、多重反響現象とある。

この句、「幾たびも」に作者の思いが重なる。鳴竜を呼ぶということは、作者の気持がなせること。その思いは推測出来ないが、そこはかとない哀愁を呼ぶ句である。

わが影と歩む甲斐路や秋深し

小山 繁子

甲州という言葉には、さまざまな印象が伴う。峻険な山国という思いもその一つ。しかし訪れた甲斐路は、四方を山並に囲まれた穏やかな盆地だった。

この句、そういう甲斐路を歩む作者の姿がよく出ている。思いを内に潜め、決して無理な表現はとらず、それでいて豊かなものを内蔵する。こころ静まる一句である。

鱗雲散骨の是非問はれけり

本多 遊方

通常の葬儀では、故人の遺骨は墓地に埋葬される。それを当然のこととして来た。しかし現在では納骨も多様に変わりつつある。この句にある「散骨」もその一つ。死者の遺骨を粉にして海や山にまくという。作者は僧籍にある。春燈の先達本多游子氏のご子息。こういう問合せもあることだろう。作者の返事は如何だったか。むづかしい問題だ。

蒼穹に雲遊ばせて木の実落つ

呉 文宗

「蒼穹」という言葉の選択がいい。天高く秋気澄む大空には、一塊の白雲が悠々と浮かんでいる。それはあたかも蒼穹に遊んでいるかのようだ。ふと近くで、木の実の落ちる音がした。その幽かな音を聞きつつ、作者は今まさに、晩秋のただ中に居ることを改めて思った。深みゆく秋をめぐりに表現した句だ。